

# 旧生島荘内の石造品



田中敦  
(尼崎郷土史研究会会員)

## 一、はじめに

今回は、市内三反田町一丁目所在の旧村社三反田八幡神社（以下「八幡神社」という。）及び市内大西二丁目所在の旧村社大西熊野神社（以下「熊野神社」という。）各境内にある石造品を紹介する。後述するように、生島村から分かれた栗山、上之島、三反田及び大西の庄下川流域四か村（以下「四か村」という。）は、旧生島荘時代から密接な関係を有していた。

## 二、四か村の歴史

沿革・由緒 生島の地名は、天長七年（八三〇）、

『日本逸史』に「生島勅旨田」として初めて登場し、建長年間（一二世紀後半）の九条家文書には生島荘が九条家の荘園として登場する。<sup>(2)</sup> 四か村は栗山の生島弁財天を共通の氏神とする他、上之島は牛頭天皇社、三反田は八幡神社、大西は熊野神社を鎮守としていた。この生島弁財天の設立縁起である「守胎山生島寺妙音院縁起」<sup>(3)</sup>によれば、生島弁財天は、寛平元年（八八九）に琵琶湖の竹生島から「萩空穂船」に乗って、淀川を經由して現在地へ流れ着いて創建され、その際、周辺に種々の神社（南約二二町に正八幡社、巽約三町に熊野権現社、乾約八町に牛頭天皇社愛宕社等）を勧請したとされる。右縁起によれば、この八幡社が八幡神社、熊野権現社が熊野神社の各起源ではないかとも考えられるが、これを客観的に裏付ける資料はない。

『尼崎の地名』は、三反田は三反の田、大西は人名にそれぞれ起源を有する可能性を指摘するが確証はない。これらの文献初出は、慶長一〇年（一六〇五）の「摂津国絵図」である。

近世の状況 寛永一二年（一六三五）の青山氏入封

に際し、四か村に分かれたものと考えられる。その後、四か村は巡見使に関する史料に登場する。巡見使は徳川将軍の代替わりごとに諸国の状況を把握するため派遣され、天明八年（一七八八）及び天保九年（一八三八）の巡見時にこれに対応する心覚えのために作成した尼崎藩領関係の控えが現存する。<sup>(4)</sup>そこには、生島の氏神弁財天に加えて三反田の八幡宮、大西の熊野権現など四か村各村の氏神が記録されている。

明治以降の状況 明治以降、八幡神社は応神天皇を祭神とする村社応神天皇社、熊野神社は伊弉冉尊を祭神とする村社熊野神社と呼称され、いずれも大正四年（一九一五）二月九日、郷社生島神社に合祀された。<sup>(5)</sup>なお、神社は他の神社に合祀されると神社明細帳から除籍されるのが原則であるが、八幡神社は神社明細帳に残されていた。<sup>(6)</sup>これによれば、神社は、三反田村字屋敷に所在し、社殿（梁行一間・桁行一間二尺三寸）、拝殿（梁行・桁行各二間）があったとされる。

八幡神社及び熊野神社の跡地は、二〇二〇年のゼンリ住宅地図にも記され、墓碑等を表す「へ」の記号が

表示されている。

### 三、石造品について

『尼崎市史』第一〇巻は、尼崎市内の中世石造品を詳細に紹介している。今回紹介する石造品は、現地調査の結果、所在地・現状に変更がなかったもので、必ずしも計測等が容易ではない高さや彫られている仏の解説は、これに依拠した。

なお、五輪卒塔婆塔は、一石彫成の五輪塔で、基礎となる地輪の背がきわめて高く、方柱状に造られたものという。板碑は、一枚の板石からなり、先端を山形に切り肩以下に二段の切り込みを付け、その下に身部（額部を含む広い部分）と根部（板石の下端にあつて不整形な部分）を持つ塔をいう。

三反田五輪卒塔婆 平成二九年（二〇一七）一月三日及び令和三年（二〇二二）七月一九日に現地調査を行った。この五輪卒塔婆は、旧八幡神社境内の南西角に、合計約五〇基の五輪塔残欠などとともに存する。花崗岩製であり、先端から地上に露出している部分までは二二



三反田五輪卒塔婆

一・五センチ、幅は正面上端二五・八センチ、下端二六・三センチ、南面では上端二七・七センチ、下端二八センチである。四面に仏像と梵字が彫られている。かなり磨滅が進んでいるが、正面にあたる東面は地藏、西面は地藏、南面は薬師、北面は阿弥陀を彫ったものと考えられる。応永年間（一五世紀初め）造立と考えられ、尼崎市内最古、最大の五輪卒塔婆である。

『立花志稿』は、この五輪卒塔婆の由来につき、東に隣接する西教寺通寺にもとあったが、寺院の火災により現在地に移転されたとの古老の言を紹介するが、詳細は不明である。現在、八幡神社の東には、西要寺という真宗寺院があるが、その山号は、西教寺と同じ生島山である。

なお、この五輪卒塔婆の写真は先の調査時に撮影し、本誌第一一八号の「尼崎のいまむかし」にも掲載され

た。<sup>(8)</sup>このときは、周囲の他の多くの石造品とともに上端部に赤い前掛けが掛けられ、五輪卒塔婆は華やかな印象を与えていたが、後の調査時には前掛けが色あせており、時の流れを感じさせられた。

大西五輪卒塔婆 令和三年七月一九日に現地調査を行った。旧熊野神社の境内は、南東端に、ここが生島神社御旅所熊野神社跡であることを記した昭和五五年（一九八〇）在銘の自然石の碑があるほか、西端に小祠、北端には神社当時からあったと考えられる一本の太木がある。この小祠内には、宝篋印塔ほうきやくいんとうの基礎や五輪塔の塔身（合計一三基）とともに、五輪卒塔婆二本及び題目板碑がありひとときわ目を引いている。

五輪卒塔婆はいずれも花崗岩製で、向かって右側（北側）の方には、地藏立像が彫られている。先端から地上までの部分は一五一センチである。もう一つの五輪卒塔婆は、地



大西熊野神社跡の小祠



(上) 大西五輪卒塔婆  
(下) 題目板碑

前述した各石造品の由来は不明であるものの、三反田五輪卒塔婆は、三反田一丁目にあった西教寺との関係が考えられる。寺院明細帳によれば、西教寺は、明応四年（一四九五）創建の真宗寺院とされるが、

上高一五八・五センチである。いずれも室町中期末の一五三〇年ころの造立と考えられる。

この五輪卒塔婆の手前には、天文二二年（一五五三）銘の題目板碑が存する。砂岩製で、地上高は五七センチであり、「勝蔵院日浄大徳 南無妙法蓮華経 天文廿二年六月十九日」の銘文が彫られている。『尼崎市史』第一〇巻及び『立花志稿』の記載内容を総合すると、この板碑は、元は大西の南端に二つ並んでいた古碑のうちのひとつであり、昭和四九年ころの下水道工事のため現在地に移転されたものと考えられる。<sup>(9)</sup>

#### 四、考察

以前あった他宗の寺院を引き継いだ可能性がある。なお、西教寺は、その後、永禄年間（一六世紀中期）に大物に移転したとされるが、元あった寺院も残り、明治以降も、大物の西教寺の通寺として、寺院明細帳に記載されていた。<sup>(10)</sup>

また、板碑は、法華宗寺院に由来するものと考えられるが、造立の経緯等の一切は不明である。元は七松に創建され、その後尼崎に移転したとされる長遠寺との関係も検討する必要がある。

ともあれ、これほど多くの中世の石造品が、三反田、大西という近隣、しかも、合祀された神社の跡地に存在することは、注目されるべきことである。

## 五、むすび

三反田八幡神社及び大西熊野神社の各跡地に残る石造品は、開発、風水害、震災、戦災などの災害をくぐり抜け、室町時代から今日に伝えられた貴重な文化財である。そして、これらは、地域の歴史、五輪卒塔婆信仰、法華宗の浸透等種々の観点からみても興味深いものといえよう。

### 〔注〕

- (1) 本稿の記載中、『尼崎市史』『尼崎の地名』『尼崎地域史事典』を典拠とする事項は、特に断らない限り注記を行わない。
- (2) 田中勇「中世の生島庄村落」本誌第三卷第三号、昭和四九年二月。
- (3) 『立花志稿』立花村、昭和一五年、五六〜五七頁。
- (4) 前者は家斉の將軍就任時のもので本誌第一卷第二号・第三号掲載（山下幸子翻刻、昭和四六年一二月、四七年三月）、後者は家慶就任時のもので本誌第一六卷第一・二号、第三号掲載（昭和六一年一二月、六二年三月）。
- (5) 「明治一二年調尼崎関係神社明細帳」本誌第六卷第三号、

昭和五二年三月、八五・八七頁。八七頁の生島神社合祀社と祭神の記述等から、熊野神社の祭神が伊弉冉尊であったと判断した。

- (6) 同前。なお、明細帳記載のためか、『兵庫県神社誌』上巻（兵庫県神職会、昭和一二年）五九二頁の生島神社の項には、八幡神社を合祀した事実が記載されていない。
- (7) 注(3)前掲『立花志稿』二五六頁。また同書一五八頁は、

明治初年に火災に遭ったことを指摘する。

- (8) 「写真ミニ展示『尼崎のいまむかし』」本誌第一一八号、平成三〇年一二月、五頁。
- (9) 『尼崎市史』第二〇巻一五七頁、注(3)前掲『立花志稿』二五六頁。
- (10) 「明治一二年調尼崎関係寺院明細帳」本誌第七卷第一号、

昭和五二年六月は、旧立花村関係の寺院の記載がほぼ欠落しているが、注(3)前掲『立花志稿』一五五、一五六頁に西教寺通寺の明細帳の記載が引用されている。

- 〔追記〕前号の「あまおぶね」「辰巳八幡神社の庚申さん」（本誌一二〇号）の一七八頁において、西昆陽の庚申塔（こうしんとう）を所在不明と記していたが、読者からのご指摘により、現在、西昆陽の陸橋下にある小祠内にあることが判明した。ご指摘に感謝するとともに、本誌面をもって、その旨訂正しておきたい。